○焼石の石原の中に石杉五十間所有之
左千夫
○神山の真木の八十杉やまとなる杉
千代に八千代に　松堂
いまのかみ古き墨の土色津杉有とぞ聞
秋の風吹く
伊豆の国道原山腹千本ばかり高さ十丈
杉田川の谷の杉の水晴れくつ杉の古い一本
松堂
杉の古き墨の土色津杉有とぞ聞
秋の風吹く
杉
杉堂
吹の川の水に流れ入れば杉の鶴
○杉のべの杉のべ時も伏せて杉の鶴いとい時
杉の見中　松杉のかまもも　赤しつくしの
又大杉もも　石川に打つ松杉　甲之
時に打つ杉　杉の下五は杉ことに
しかれども　杉のあれば時は時ぞ　杉水
○杉の御使り時ぞ　海松の近つく
○杉の御使り時ぞ　海松の近つく
○杉の御使り時ぞ　海松の近つく
○人の居田の杉　杉の下　杉
杉堂
○人の居田の杉　杉の下　杉
杉堂
左千夫

杖

○焼石の石原ゞ中に石杖立て南無観世
音せ玄薩とかけり　左千夫

○神山の真木の八十杖ゆるぎなくわたる橋は
千代に八千代に　格堂

いそのかみ古き堤の五百津杖腐ちて細りて
秋の風吹く　里

伊豆の国達磨山腹千にふぶく高菅ゞ原に
杖き流みけり

○角田川山岸の八十杖悔めども過ぎにし子等の
繰りまれなくに　格堂

落ちたまる秋の水清くうつ杖の音さへさやく
山の黄葉敬る

○橋杖に縄とり野糸ぎ浸しおく糸瓜腐りて秋か
たまけぬ　節

暁の川は氷に鎖されて残れる杖に鶴飯の
見ゆ

○路のべの切杖のへに羽を伏せて朝霜いとい晴
然居る見ゆ　之

石川に打つや狭杭のひまもなく恵ひつさひめ
丈夫ども
妹がりは篠の刈杖踏まず返は破るを踏みて
し行かむ

○○○大伴の御津の崎ふ澪杭に近つく船は秋の水
子が船かも

○秋川のはやき水瀬に浮く杖に相倚りてみる底つ石
　　沈

○大君の御駒つあぎし杭ならば注連をへて置
せ々のしるしに　格堂

○○○樺太を国二分けて境杖よろしく折てるふさ
はたゞへし　左千夫

特別
文庫14
A115